



智祥江今 の本

第5巻

ぼんぼん

理論社

智祥江今
の本
第5卷

ぽんぽん

理論社

今江祥智の本第5巻

一九八〇年一月初版

一九八七年三月第六刷

著者 今江祥智 ©

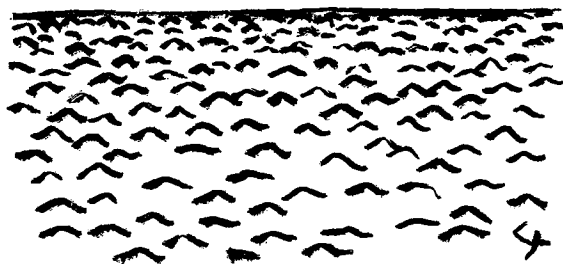
発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話〇三(二〇三)五七九一(代表)◇

振替東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます



ぼんぼん

五月の日曜日	7
青いろの月曜日	17
死の影の下で	27
一九四一年夏	37
知らなかったも……	47
狸と戦争	58
困ったおっちゃん	68
昭和十七年三月節句	80
京のおへそ	91
天狗と飛行機	102
間奏曲―昭和十七年五月のある日曜日	124
日記をつけるとき	135
プールサイドにて	145
星と海	156
ベートーベンから空襲まで	167
一年ののち……	178
京の夢大阪の夢	188

	防空に関する一章	189
	「船」の外「船」の内(一)	200
	「船」の外「船」の内(二)	213
	光と闇と	225
	さいごの麦わら帽子	236
	身代り二題	247
	火星とショーキ	259
	ああ、トージョーはん	271
	神隠しと探偵ごっこ	283
	山のむこう 空のかなた	295
	「おとしだま」の季節	307
	その前夜	319
	炎の夜	330
	炎の夜につづくもの	342
	朝の地獄	354
	お祭りの日―エビローグ	366
あとがき		379
解説 上野瞭		381

編集委員 上野瞭

長新太

灰谷健次郎

装 幀 平野甲賀

装 画 長新太

制 作 小宮山量平

発 行 山村光司

編集担当 日比野茂樹

本 文 加藤文明社

表 紙 ダイニツク

カバ 1 トラヤ印刷

製 本 誠製本

用 紙 十条製紙／日興紙業

今江祥智の本
第5巻

ほんほん

五月の日曜日

1

——……こうして話しているうちにも、今日、昭和十六年五月二十九日の太陽は、大阪の西の空に沈んでしまいました。やがて気の早い星が姿を……。

プラネタリウムの解説者の声が、ぼわんとふくらんだ感じで天象館てんしょうかんのドームにひろがって続いていた。すると、洋ひんしのすぐ横のあたりで、

——いやあ、ほんまやわあ。

澄んでよくとおる声があがって、細い腕がついとび、一番星をちゃんと指さしていた。

目の早い子やなあ……。洋は思わず声のしたほうをふりむいて見たが、むろん、顔が見えるわけがなかった。天象館のなかは、もうすっかり夜の色だったのである。ついさっきまでは、夕映えのなかに立つ奇妙なロボットに見えたプラネタリウムでさえ、闇のなかにとけていた……。

洋がまた一番星に目をもどしたときには、そのまわりをいつかもう数十の星が、びっしりとまいていた。

「……月も雲もなければ、今夜八時、この四ツ橋の電気科学館の屋上に立つと、ざっとこんなふうな夜空が見えるはずだ。」

解説の声が続けて、そこで初めてちょっとことばを切った。しずまりかえった館内のだれものまわりに、夜がいつそうほんものらしくひろがる気がする一瞬だった。

さて……と、解説者が次にうつったとき、洋は横の洋次郎に小声で話しかけていた。

「にいちちゃん、ほんまにようでけとるなあ、このプラネタリウムたらしい機械。」

「そらあたりまえや。なんせ、ドイツのツァイス製やさかいなあ。」

洋次郎は、まるで自分がカールツァイス社の社員であるみたいに、いばった調子で答え、

「ま、黙って、よォ見とくんやなあ。」

と、先輩ぶった。

洋次郎は洋と三つちがいの中学一年生、ここへはもう何度かきていたが、洋はその日が初めてだった。

だから洋には、この何もかもがめずらしかった。電気館の小さな実験装置のボタンも、いろんな模型を動かすボタンも、わけのわからぬまま、とにかくかたばしから押してやった。洋次郎はそんな弟のことを、はじめはあきれ顔で見ていたが、すぐにだんだん気難しい顔になって、そないにみんなさわつとったら、肝心のプラネタリウム見る時間が無うなるやないか……と、せきたてた。そないいうたかて、こっちは初めてやもん、しゃあないがな……と、洋は口をとがらせたが、おこりんぼのにいちちゃんのげんこつがこわくて、ほどほどにしてみました……。

けれど、初めて見た見たプラネタリウムは、そんな洋の不満な気もちを吹きとばすのに充分だった。この、鉄啞鈴のおぼけみたいな機械のことは、くる前から何度か聞かされていた。それにお前、そいつがまた日本に一台し

かないのんが、この大阪にあるちゅうわけや、うれしいやないか……と、洋次郎は大阪市長の代理みたいなようすでいったが、ほんとに百聞ハ一見ニシカズ、だった……。

しかも、それがまた、これほどうまく「夜」をつくりだすのに、洋はうっとり見とれてしまった。

するとまたそのとき、さっきの女の子の音が、小さく、けれど洋の耳にははっきり聞こえるくらいにこういった。

―おかあちゃん、うち、眠ねむとうなってきた。オヤスミ……。

それから、ああんちゅちゅなあくびの音がして、おかあさんらしい声がもしょもしょと小言こごんをいうのが聞こえた。

きっとまだ小さな子なので、ほんものの夜と勘ちがいしてしもたんやろ、解説がむずかしすぎたんやろ……と、洋は見知らぬ女の子に同情し、くすんとひとり笑いしてから、再び解説者の声に耳をかたむけた。

みどりいろの矢印やじるしがうつるランプを使って、五月の星座をゆっくり説明していた解説者は、大熊座のところにくと、おきまりの北斗七星と北極星の説明にとりかかった。

それやったら、ぼくかて知ってるわ……。洋はこのあいだ読みおわったばかりの天文学入門の解説を思いおこした。北斗七星さえ見つけたら北極星はすぐに見つけられるし、北極星さえ見つけたら方向がわかる、こらゼッタイや、ちゅうやつやる……。

説明もたしかにそのとおりのことをしゃべっていた。ところが、そこで思いがけないことをいいたのである。いまはひしやくの形をしているこの七つ星（ほんととは、柄えの先から二つめの星ミザルに、アルコルと呼ばれる五等星がついて八つ星であることまで、洋は知っていた……）が、いつかは形がくずれる、というのである。

そんなアホなことが、と洋は思わず洋次郎のひじをつついた。洋次郎もそのことは聞き初めらしく、ほんまかいなと声にだしてつぶやいた。兄弟の頭のなかには、まだ絶対に動かず変わらぬものとしての北極星と北斗七星が輝いているのだった……。

—ではちょっと、そのようすをお目にかけましょう……。

解説者がいうのと同時に、軽いモーターのうなりがして、北斗七星だけが少しずつ動きはじめた。両はしの星は西へ、あとの五つは東へ動いていって、ひしゃくの形がどんどんくずれていった。

—これで、五万年から六万年のち……。

解説者はあっさりいい、ひしゃくがすっかりくずれたところで、これが十万年後の北斗七星です、と結んだ。

—それからついにつけ加えますと、北極星も変わります。いまの北極星は、地球が自転している軸の方向にたまたま見えるから天の北極にあり、北を指すのですが、一万三千年前は織女星しじょうが北極星でした。ですから、いまから一万二千数百年後には、また織女星が北極星になるはず……。

解説者が機械のボタンを押すと、くずれた北斗七星は、またおそろしい早さで（なにしろ十万年なのである……）元にもどりはじめ、数十秒ののちには、昭和十六年五月二十九日の北斗七星の姿にかえっていた。

もう十万年すぎてもたんか……。洋はあっけにとられて空をながめ、

—ほんまに人をびっくりさせる機械や……。

正直に声にだした。

—おれもやでエ。

洋次郎も正直だった。その日、兄弟の頭のなかで、「ゼッタイに変わらぬはずのもの」が一つ、静かにくずれたのだった。

*

北斗七星の話にあんまり驚いたので、洋の耳にはあとの解説の声がはいらなかった。気がつくといつかドームの空の星はぐんとへっていて、東の空がほんものの夜明けの紅いろに染まりはじめていた。

―それではこのあたりでおしゃべりはおしまいにし、心静かに五月三十日の朝を迎えることにいたしましょう……。

解説のしっぱだけが、ようやく洋の耳にとどいた。声にかわって、優しい音楽が流れ、星はみるみるうちに姿を消し、太陽が顔をのぞかせた。なんやほんまに一晚すぎてもた気がするなあ、と洋はまだ立ちあがれずにいた。すっかり明るくなったとき、館内のシートの三分の二くらいを埋めていた見物客たちは、もう半分以上、出口から消えていたし、洋次郎ももう、二、三步歩きだしていて、ぐずぐずしている洋を見ながら、ほんとの朝のようにあくびをした。そこで急に、さっきのあくびの主のことを思いだして、洋は立ちながらふりかえった。

シートには、母娘おやとのかわりに、かわいい麦わら帽子がふわんとすわっていた。

―あの子、忘れていきよったな。

洋が声をあげた。

―あの子、やと？

洋次郎は、けげんなようすで問い返し、おまえ、知ってる子か？　ほならもっていったらんかいな。ちがうちがう、と洋は手を振ったが、洋次郎はせっかちに、もう帽子をとりあげて洋におしつけていた。

―さ、はよもっていったれ。

そないいうても、だいいち、あの暗闇では顔も服も見えへんかったやないか――そういおうとして、洋はなぜか口にしたのをやめた。そして自分にもよくわからない気もちで、

ーん。まだ追いつけるやろさかいなあ……。

と答えていた。答えながら、そうや、あの声や、声さえ聞けばちゃんとかかるやないか……と、自分にいい聞かせていた……。

2

ふたりがエレベーターの前に出たときには、もう最後の客が数人のこっていただけだった。女の子は一人もいなかった。

兄弟は、男の二人連れにはどうにも不似あいな麦わら帽子を、むかいあわせになってかくすようなかっこうでエレベーターの奥に立った。それでも洋はみんなから見つめられている気もちで、ちょっぴり赤くなりながらうつむいていた。そんな弟のようすを、洋次郎はまたちがった目で観察していた。そして、この帽子の持主がどんな女の子なのか想像してみた。かわいいが、しゃっきりした感じのする帽子だった。リボンは海の色ぐんじようの群青で、短くきっぱり切ってあった。花かざりやサクランボといった麦わら帽子によくあるアクセサリーはついていなかった。

この帽子が似合うのは、小麦色によく日焼けした、きゅんとしまった小さな顔の女の子で、それなら、やわらかなわらみtainな短い髪かみの毛がびったりだ……と、洋次郎はひとりうなずいた。すると、弟がだいじそうに胸にかかえている麦わら帽子から、太陽にやけた健康そうな髪かみのにおいがふんとにおいたつように思えてきた。そこで、そんなことまで想像した自分に、気ヲツケイ！の号令でもかけたい気になり、いや、それというのも、だいたい弟の将来あしたのためを考えてやっての想像やさかいになあ、と思いいおした。それでもまだ少してれくさかった……。

見つからへんかったら、どないしょう……。洋にはそれしか頭になく、エレベーターが一階につくなり、とびだすように玄関からかけだしていた。てっきり外へでているにちがいない。もしかしたらもう四ツ橋の市電の停留所あたりに立っているかもしれない——と思ったのだ。

—おい、待てよ。

洋次郎が追いついてきて、いっしょに見まわしたが、日曜日の午後の四ツ橋の交叉点にも橋のほうにも、それらしい母娘連れの姿は見当たらなかった。

—ひょっとしたら帽子忘れたことに氣イついて、取りにもどったんとちゃうやろか？

—ん。

ふたりがそろって電気科学館に引き返し、玄関から入ったとき、横のエレベーターのほうから、あの澄んだ声
がとびだしてきた。

—そやかて、うち、ほしいもん……。

その声に引かれたように、洋は気がつく少女の前に立っていた。うつむいたまま、あの、これ忘れてはりました、と帽子をさしだした。

—いやあ、うれし！ いまもどつてさがしてたけど、なかったん……。

それから、ほんまにほんまにおおきにイ……と、尻上りの甘い口調で礼をいった。うつむいたままだった洋は目の前の少女の銀青色の服が、ちっとも動かないのに気づいて、あわてて目をあげ、もつとあわてなければならなかった。お礼のしるしに、とでもいうふうに、握手のかたちに手をさしのべていたのである。おまけに、少女は洋が思っていたよりずっと大人びてみえるくらいに大きかった。

うへっ、やないか、二重にうへっやないか……と、洋次郎はそんな少女のようすを見ながら思っていた。洋次

郎の想像は半分当たって半分外れていた。少女はたしかにあの麦わら帽子にびったりの、ひきしまった小さな顔の持主だったが、色はぬけるほど白かった。それに、黒い長い髪の毛が、顔の白さをいっそうひきたてていた。

まぶしいみたいに白いわ、と洋次郎がまるでお日さんをじかに見たときのように目を細めたとき、——少女のほうからさっさと洋の手を握った。それから、にっと笑うと、くるんとまわれ右していつてしまった。洋次郎の目の奥には目も鼻も口もない、まぶしいくらい白い顔だけがやきついていて——道であってもわかりそうになかった。

洋は、相手ににぎられた右手が、ちーんとしびれてしまったみたいで、ぼんやり立っていた。京ことばというのだろうか、少女の母親が、歌うようにゆったりした調子でお礼をいうのも、耳に入らなかった。洋の目の前を、きれいな魚が泳ぎ去るように、銀青色の服がゆれて——消えた。

—あ、もういつてしまいはったんか。

洋次郎が思わず声にだしたとき、洋はあやつり人形みたいにぎこちなく右腕をあげていた。玄関のガラス戸ごしに、少女が大きく右手をふるのが見えたからだった……。

—だれや、あの子？

—知らん。

—知らんちゅうたかて、握手したり、手ェふったりして、こいつ……。

洋次郎は、うらやましさをかくさなかった。

—そやかて、今日初めて会^あうたんやもん。

初めてで握手か……。洋次郎はめずらしい動物でも見る目つきになって、弟を見直した。洋はまだ胸に麦わら帽子をかかえているような手つきで、ぼやんと立っていた。洋次郎はゆっくりとその手つきを押しもどしてやりながら、ほな、帰るで、といった。